

Gallery of The Fine Art Laboratory

拝啓 時下ますますご清祥の事とお慶びを申し上げます。

この度、10月6日（水）から10月23日（土）まで、武蔵野美術大学「Gallery of The Fine Art Laboratory」にて、熊谷卓哉「Sea Change」展を開催いたします。是非ご高覧いただきたく、ご案内申し上げます。

熊谷卓哉 「Sea Change」

外側こそ重要で中身はなんでもいいと思うこともあれば、中身が尋常じゃなく気になる時もある。

大体そういう時はあまりまともじゃない。たぶんパッケージだけが面白いと思えるのは飢えても乾いてもいない時なのだろう。

でも外殻を引き裂いて内容物が溢れても、中身を確認した、って感慨が残るだけでポカンとする。

何かに期待するその有り様がずっと続くのは耐えられない、だけど可能性は在り続ける。

心を中途半端さの中に置き去りにして震える。

気づくと現れる、歪な怪物の世界。恍惚と諦念に揺さぶられて、距離が遠退いていく（君はいつだって自分がどこにいるかわかっているから）。

隠された通路は自分の手で探り当てる。一人その奥へ入っていく。

熊谷卓哉

【作家略歴】

熊谷卓哉/ Takuya KUMAGAI

1987年 京都府生まれ

2012年 武蔵野美術大学造形学部彫刻学科卒業

【個展】

2014年 「愛と暴力の幼稚園」 Antenna Media 京都

【主な展覧会歴】

2021年 「ニハノ二八日間」 ニハ 京都

2020年 「Rollin' Rollin'」 Finch Arts 京都

2020年 「SUBJECT」 HOTEL ANTEROOM GALLERY 9.5 京都

2020年 「OBJECT at VOU」 VOU/棒ギャラリー 京都

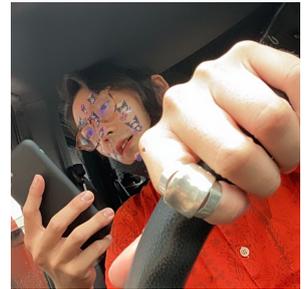
2020年 「Before the Birth of a Book」 hair salonいつくし 東京

2019年 「OBJECT」 ロームシアター 京都

2019年 「DOOKS Book Exhibition Vol.6」 nidi gallery 東京

2019年 「PRIMARY①」 ギャラリー-5610 東京

2018年 「パープルタウンでパープリズム」 パープルルーム 神奈川



【主な展示企画】

2020年 「2040年11月10日は土曜日である」 qp展 RC HOTEL京都八坂 京都

2020年 「OBJECT at ANTEROOM」 HOTEL ANTEROOM GALLERY 9.5 京都

2020年 「MICROCOSM」 今井麗展 RC HOTEL京都八坂 京都

2020年 「イミテーション・オニキス」 江頭誠展 RC HOTEL京都八坂 京都

2020年 「OBJECT at VOU」 VOU/棒ギャラリー 京都

2019年 「OBJECT」 ロームシアター 京都

2019年 「道を作る」 西野壮平展 RC HOTEL 京都八坂 京都

2019年 「泊まる彫刻」 富井大裕展 RC HOTEL 京都八坂 京都

2018年 「stone age in the woods」 加納俊輔展 RC HOTEL 京都八坂 京都

2018年 「Multitasking」 相島大地展 RC HOTEL 京都八坂 京都

【開催概要】

会期：2021年10月6日(水)～10月23日(土) ※日曜休廊

会場：Gallery of The Fine Art Laboratory

〒187-8505 東京都小平市小川町1-736 武蔵野美術大学2号館1階

主催：Gallery of The Fine Art Laboratory (彫刻学科研究室企画 問い合わせ先：042-342-6055)

※ 10月7日(木)：15:00よりオンラインアーティストトークを行います。

URLなど詳細は、武蔵野美術大学彫刻学科研究室ウェブサイトにてご確認ください。

※ 新型コロナウイルス感染症の今後の拡大状況に応じて会期、入校条件が変更になる場合があります。

【展覧会によせて】

彫刻の異邦人

異邦人。【エトランゼ】と読む。熊谷卓哉の展覧会に際して、この言葉を冒頭に掲げるのは、熊谷の活動の多様さの故である。自作の発表に加えて、アーティスト・ラン・スペースとアートフェアの運営。ホテルのアートディレクター。昨年からクリエイティブチームを結成し、ショップの運営まで始めているらしい。自身の肩書きも美術家、ディレクターとしていたので、多様さは意識してのことだろう。それを踏まえて私は熊谷を、彫刻を旅する異邦人と呼称したい。その活動は、彫刻への実験精神が下地となっているからだ。そして、熊谷が発する彫刻という言葉からは、特に近代の彫刻への優しい眼差し、心情が漏れ出ている。宝の山でありながら、使い道が時代から抜け出せない感もある近代彫刻。熊谷にとってその象徴となる技法は塑造だろう。塑造への抜けきれない愛情が、熊谷を多方面に向けた航海へと走らせる。

塑造の特性は、制作者の物質と対象への見方が、そのまま表面と形象に現れる点にある(と思う)。その点では、他の彫刻技法も同様であり、そもそも彫刻自体が見方を表現するメディアと言いつてもいいかもしれない。中でも塑造に特性があると言わしめるのは、現れる見方の波間の如き繊細さの故である。その微妙な形と表面の揺れ動きには、物質、対象への感情、親密さや恐れなどの距離が転写される。熊谷を彫刻への旅に誘うものは、塑造の未だ底の見えない可能性であり、その煌きを奥に秘める近代彫刻の魅力である。

熊谷の制作の根幹は、3Dプリンターを主な技法としたオブジェクト(敢えて自作をオブジェクトと呼んでいる節がある)だが、近年は、そのオブジェクトを如何にして見るか(感じ取るか)／見えないか(感じ取れないか)への興味から、展示空間に向けてアプローチの舵を切っている。今回もギャラリーを起点に、入れ子状の実空間／マターポートによる仮想空間と、更にそこからしか入れない空間／実空間からしか入れない仮想空間など、兎に角、空間が反転、移動しまくりになる予定。近年話題のデジタル表現に聞こえるかもしれないが、肝心なのは、試みの全てが彫刻というフィジカルな経験への関心から始まっているという、その動機だ。

私は、今回の展示プランを聞いた時に鎌倉の大仏を想起した。ブロンズ製の仏像を外から見た時と中から見た時(この大仏は中の空洞に入ることができるのだ)の、その反対にある空間への想像力の可能性。更には、一度も実物を見たことがないまま彫刻に触れている一例えば石膏像とそのデッサンその想像力の可能性を想起する。熊谷は、彫刻に触れているが触れていない様な、独自の経験を抛り所に空間と時間を放浪している。彼が運営しているスペースの名は、「波さがしてつから」。見つけるのではなく、探す。この言葉に熊谷の彫刻への信頼がある。

富井大裕(美術家、武蔵野美術大学准教授)



《rabbit hole》

木材、塗料、ホログラムシート、写真
H1210×W1600×D300mm
2014年



《Wave》
PLA,3DCG
Variable size
2018年



《公共彫刻計画を含む彫刻構成》
PLA、アクリルボックス、木材、塗料
H1300×W460×D460 mm
2020年